

## ○遠野の生産者に聞く！

遠野市乗用馬生産組合員の中で最年長(2019年3月現在)の仁田寛さん(87)。馬産の大ベテランであり、種付け所の「遠野馬の里」や10km以上もある山の牧場へ向う道を、馬運車ではなく親子馬を引いて歩くという健脚ぶりです。



親子馬を引いて歩く仁田さん(2003年5月撮影)

## 遠野馬通信

馬産地遠野とホースマンを結ぶ  
情報誌

No.29

2019年3月31日

## ○仁田寛さん 「家族がいなければ馬産はできない！」



仁田さんは子馬の手綱を親馬の手綱に結び、親馬の手綱だけを引いて歩きますが、子馬は大人しく親馬に寄り添って歩いています。「親子馬を引いて歩くことが子馬の馴致になる。それに自分の足で歩くと2時間以上かかる道でも馬を引いて歩くと1時間で行ける」という仁田さん。得意の民謡を歌いながら馬を引く姿はまさに遠野の原風景です。仁田さんの馬産のポリシーは「馬を預かる人の気持ちに寄り添える大人しいを馬つくること」。そして「夏山で過ごした親子馬は秋の早いうちに里に下げ、11月から12月は家でたっぷり食べさせる」。セリでは家に代々伝わる特別なトウラクをつけて愛馬を送り出します(写真左 2008年)。生産した子馬すべてが印象に残っているという仁田さんですが、特に思い入れがあったのは「寛桜」というセル・フランセ系の牝馬だそうです。寛桜は子育て上手な母馬で毎年子馬を産んでいましたが、セリでは血統のよい輸入牝馬が生んだ子馬に比べて安値の取引でした。けれども「2年に一度しか生まれない高値の子馬と、安値でも毎年確実に生まれてセリに出せる子馬なら、結果は同じ」というのが仁田さんの考え。2008年10月、仁田



さんは寛桜の娘・ヴァリサクラを後継ぎにしました。彼女は母馬がそうだったように毎年元気な子馬を産み、セリに産駒を送り出しています。子供の頃から馬産に携わってきたという仁田さんは「家族がいなければ馬産はできない」と断言します。家族で愛馬を囲む古いセリの写真を今も大切にしている仁田さん。この数年のセリでは、高齢の仁田さんと一緒に息子さん(当時)が馬を引くようになりました。それが仁田さんの言葉を物語っているようです。

写真左：2018年のセリでヴァリサクラの子(1歳)を引く仁田さん親子

仁田寛氏：遠野市附馬牛町在住。生産馬は2007年第59回全日本障害大会中障害Bで優勝したジョニークエスト(JRA)や2007年および2010年の福島グランプリで優勝したイクシオン(当時 湯の町乗馬クラブ)など。